

武州大相模不動明王瑞像記

越谷市郷土研究会 加藤幸一

『武州大相模（おおさがみ）不動明王瑞像記（ずいぞうき）』は越谷市内の大相模の西方（にしかた）にある真大山（しんだいさん）大聖寺（だいしょうじ）に現存している巻物の縁起状で、当時の住職英山（えいざん）の依頼によつて享保十四年（一七二九）八月に江戸の宝林山靈雲寺第三世の慧曠（えいぎ）が文を作り、光天が書いたものである。約一五〇〇字の漢字よりなる漢文で著されている。概要は通りである。

【大相模不動明王瑞像記の概要】

①寺誌（じし）の紛失

寛文年間（一六六一〜一六七二）

②不動坊の起り・良弁創建説（古誌）と大相模郷・真大山不動坊の名付け

※ここではいつのことか年代が明記されていないが、後の資料によると天平勝宝二年（七五〇）となる。良弁は華嚴宗第二祖、東大寺大仏造立に尽力し東大寺初代別当となる。

※密教は既に七世紀後半には断片的な形で我が国に伝えられてはいたが、延暦二十三年（八〇四）に入唐した空海（真言密教・東密）・最澄（台密）によつてもたらされて本格的に盛んになることから、不動坊の起りが奈良時代であることに疑問が残る。

③不動坊の起り・翁創建説（言い伝え）

延喜年間（九〇一〜九二二）

※平安初期は不動明王など密教全盛時代。

※太平洋戦争で供出されたこの寺の鐘には延暦年間（七八二〜八〇五・延喜の誤りか）に鑄造したものを明和三年（一七六六）に再鑄造したと刻されていたと伝えられる。

④不動明王像の昔も今も変わらぬ靈驗

⑤家鳴（やなり）不動のいわれ

天文年間（一五三二〜一五五四）

⑥不動坊と岩槻城主

天文〜元龜年間（一五三二〜一七七）

※岩付太田氏全盛を築く岩槻城主太田資正（すけまさ）及び岩槻城将としての玉繩（たまなわ）城主北条氏繁の信仰と夫役（ぶやく）の免除。

⑦定伝（じょうでん）と密教寺院への改宗

天正十二年（一五八四）

※原文では密教の寺に改めたと読み取れる。

※密教の寺にはよく不動明王像が安置されているが、それまでは顕教（例えば華嚴宗）の寺であったと考えてよいのか。それが天正十二年に密教（真言宗）の寺に変えたと言うのであろうか。

※奈良東大寺（華嚴宗）には九世紀末の作といわれる不動明王像が秘蔵されていることからわかるように密教が他宗派にも強く影響を与えていた。それゆえ密教でない華嚴宗に属していた不動坊で不動信仰が土着の人々によってなされていたとも推定できる。定伝は後の資料によると大聖寺の中興「ちゅうこう」となる。

⑧ 定伝と家康

天正十九年（一五九一）十一月

※六十石の喜捨（きししゃ）と寺名の大聖寺への変更及び江戸城の鬼門となる。

⑨ 定伝の弟子入り

慶長二年（一五九七）

※京都醍醐寺の義演大僧正（ぎえんだいそうじょう）への弟子入り。

⑩ 定伝と家康

慶長五年（一六〇〇）

※関ヶ原の戦いに出陣する家康の先勝祈願と寺宝となった刀。

※この中で、松平右衛門太夫、村越茂介、善阿弥の名がでてくる。

茂介（通称）とは村越直吉（一五六二〜一六一四）を指すのか。

⑪ 隆元（りゅうげん）と大聖寺の火災

享保五年（一七二〇）二月

※この中で、不動堂の無事が述べられている。

⑫ 隆元の大聖寺再建

⑬ 隆元の二天門創建

正徳五年（一七一五）

※この中で二天門が享保五年の火災に免れたことが述べられている。

⑭ 大聖寺の伽藍神（がらんじん）である愛宕神社

⑮ 親如法師と家康のおかげで盛んになった大聖寺

天和元年（一六八一）

※この中で、一月、五月、九月の各二十七日に催される不動会（え）の盛んなことが

述べられている（現在は二十八日）。

⑯ 現住職英山（えいざん）と「含満井（がんまんせい）」の起こり

※現在の参道東側の本堂そばの水屋の裏あたりにかつて水垢離（みずごり）があり、そばの弁天池（今も湧き水によって涸れずにある）から竹の樋（とい）で呼び水をし、戦後まで見られた。英山が『含満井』と書かれた立札を立てた所はここかもしれない。

⑰ 英山と瑞像記

次に全文の訳を紹介する。訳にあたって、石井章治郎氏（東京都足立区西保木間三の九の五）の協力を得た。

【大相模不動明王瑞像記の全訳】

武蔵国の大相模（＝模）にある不動様のめでたい像の記録

① 武州（武蔵国）崎玉郡（さきたまぐん）大相模郷（おおさがみごう）の真大山（しん

だいさん)は(「者」||「は」)、不動尊の靈域で、瑜伽(ゆが・ヨーガ)の淨(きよ)い土地でもある。もと寺誌(じし)一卷があり、其の文は纒(わづか)十余紙だったが、惜しくも、寛文年間(二六六一〜一六七二)に紛失した。

②曾て(この)古誌を読んだ者が、語る処によると、昔奈良にいた、良弁(ろうべん)僧正(そうじょう)は、神のようにあらゆる方向を教化し、大きな利益を開き導き、方(まさ)に東国に来て、相模国大山(おおやま)に(寺を建築する地を)ト(ぼく・占って選ぶ)して築き、心清らかに身を修め一生懸命に励んでいた。その時、不動明王が形を現し、良弁を慰め諭した。良弁は仰ぎ見て、非凡な考えが生まれ、自ら其の顔かたちを模倣して木に刻んだ「長さ一尺七寸(五十一・五サ)」。おつきの人に負わせ、(行く)所には必ず随行させた。此の村に来られた処、俄(にわか)に磐石(ばんじやく・大きな岩)のように重くなり、百人千人と雖(いえど)も之(これ)を持ち挙げる事ができない。そこで有縁(うえん)の地で、之(これ)を留めるべき験(しるし)とわかった。將に此(ここ)に妥(やすら)かに奉ろうとし、誓って曰く「尊意ならば、前のように軽くなりますように。」と。試みに再び持ち挙げてみると、おほとりの羽毛のようにひらひらとしていた。ついに堂宇を創建して、安置し供養した。爾(そ)れ以来、郷は大相模と称し、山は真大山と号し、寺は不動坊と名づけたと言う。

③又(また)此の像について伝えられるところによると、相模国大山(おおやま)の尊像と、同木で刻してあり、(木の)根本を用いている。然るに延喜(えんぎ)年間(九〇〜九二二)、一人の変わった翁(おきな)がおり、庵(いおり)を結び(この)郷の古荒川(ふるあらかわ・今の元荒川)もとあらかわの岸に住んでいた。身体は清流に沐浴し、外では潔斎(けっさい・心身の清め)を以て、心に仏乘(一切衆生をことごとく成仏させる教え)を欣(よろこ)び、内では精進(しょうじん)を以て、常に(不動)明王に帰依し、復(また)た余念がなかった。日照り・長雨(ながあめ)ややり病(やま)など、凡そ難(がた)あれば、すぐに日夜(にちや)郷里(きょうり)を巡行しては、明王真言(みょうおうしんごん)を唱え、救済(きうさい)を以て、其の効験(こうけん)こうげん)が無いという事はなかった。地元の人々は「生き不動」と呼んだ。翁は相模国の大山へ詣(ま)でること、年に十(回)を以て数えた。その願(ねが)いは靈験(れいけん)あらたかな像(さか)を得るという所(ところ)にあった。ある朝(あした)朝(あ)朝(あ)朝(あ)に彼(か)の山(やま)に赴(ま)かんとし、途中で平阜(へいぶ)・丘(か)の上(うへ)の平地(へいぢ)を歴(へ)て「即ち今(いま)のお旅(り)どころ」、ある苦行者(くるこうじや)に遇(あ)う「世に言う山臥(やまぶし)」。笈(きゆう)・行脚僧(ぎやくそう)や山伏(さんぶつ)などが、旅(り)の際(とき)、物(もの)を入れて背負(せお)って持ち運ぶ、竹(たけ)で編(あ)んだ箱(はこ)。おい。)を負(お)い石(いし)の上(うへ)に座(ま)り、あごひげ・髪(かみ)の毛(け)は垂(た)れ下(くだ)がり、(その)威嚴(いげん)は尋常(じんじょう)でなかった。翁(おきな)、初めて会(あ)って、すぐ互(たが)いに旧友(きうゆう)のよう

になった。行者曰く「あなたは何を求めて、幾度も大山に行くのか。」と。翁は其の志（像の取得）を以て告げた。行者は髀（もも）を搏（う）つて、溜め息して感嘆して曰く「遭遇したのは奇縁かな、我は瑞像を持っていて、秘蔵すること久しく、たとえ値段の付けられぬ貨（たから）だと言えども、之（これ）と交換したくないのだが、今あなたが懇ろに祈願しているのを感じた。」と。則ち起立して笈を開き、不動明王像を出して、与えた。巖かで極めてものすごい威怒相は、人間わざではなかった。行者は肩を張り像を指し、正座して翁に言つて曰く「あなたは之（これ・この像）を知っているか、嘗（かつて）良弁法師が、（不動）明王の真の身体を感得してご覽になり、手ずから（自分の手で）之（これ）に摹（の）つて作った物（者）こそ、此の像です。」と。置くとすぐ立ち去る。翁は怪しみながら行くところについて行った。北へ百歩教えたところまで、行者顧みて曰く「此の地は不動明王の靈験あらたかな寺（にふさわしい）、須らく（ここに）安置せよ。」と。そこで忽然と姿を消す。翁は大いに驚き歎（よろこ）び躍（はね）て、「おそらく是（これ）は大山の大聖（だいしよう・み仏）が私に授ける所である。」と思つた。そこで爾（そ）の処で、茅を切り払つて像を安置した。翁は亦（また）多年にわたつて苦行し、其の死去した所はわからないと言ふ。二つの縁起は稍（やや）異なっているが、併せて伝えよう。

④抑（そもそも）草創以来、数百余年（の間）、（この）像に奉仕する者は、或いは出家者の流れ、或いは優婆塞（うばそく・男子の仏教信者）の類いであつたり、屢（しばしば）交替したが、（この）像の靈験は今も昔も変わらない

⑤天文年間（一五三二〜一五五四）初期に至つて、盗人が（この）像を取り持ち去り、武蔵国江戸の某宅に宿つた。其の夜、家屋が鳴動（地震の時に生ずる土地の震動と音響）し大いに揺れたので、賊は恐れかきこみ、罪を謝り、すぐに像を送り返した。以来何事か有るときは、寺は必ず震動した。故に世の人々は「家鳴（やなり）不動」と称した。

⑥天文（てんぶん）・弘治（こうじ）・永祿（えいろく）・元亀（げんき）の間（一五三二〜一五七二）は、武蔵国の岩村（いわつき）城主太田資正（すけまさ）、及び北条氏繁（うじしげ）が、当山を崇信し、財貨を施し夫役（ぶやく・労役）を免除して、家門の栄えを謀つた。

⑦天正十二年（一五八四）、沙門（しゃもん・僧侶）定伝（じょうでん）は「紀伊国（今の和歌山県）の根来寺の性盛法印の付法（師が弟子に教法を伝授して後に伝えさせるこ

と)の弟子」、道人(僧侶)として名声が有り、住職となった機会に(「便」=機会)、すぐ当山をすっかり改めて、密教の寺とした。其の功績は、寔(まこと)に称賛すべきである。

※紀州根来寺・・・覚鑿(かくばん・新義真言宗の開祖)の創始

⑧厥(そ)の後、東照神君(とうしょうしんくん・家康公)が狩りをした折り(「次」=折り)、わざわざ茲(ここ)に来訪し、像の事の縁起を問われた。定伝は恭しく申し上げた。神君曰く「靈(験)なるかな、汝予(よ)が福を像に折れ。」と。(天正)十九年(一五九一)十一月、神君は頗(しきり)に像の靈験を感じて、定伝を召して、水田六十石を喜捨(きしゃ・喜んで寺に寄進すること)した。「朱印(状)及び山内(寺の境内)の「非常」(変異)を禁ずる(封ずる)書が現存」。且つ寺に命じ大型(だいたい)の道場と為した。乃(すなわ)ち此の山は、武城(江戸城)の鬼門(北東)を鎮める。これ(茲)より已来(いらい)、別に僧侶六人を置き「今の六坊(六人坊主)が是(これ)れ」、早朝から夜遅くまで力を勤(あ)わせ、太平を祈り、主君の恩を感謝した。

※山内の非常を禁ずる書：不動明王像の通力が原因になって発する怪奇現象(非常)をまじないで封(ずる(禁ずる))ための祈禱書

⑨慶長二年(一五九七)、定伝は都に上り、醍醐寺の座主(ざす)である義演(一五五八～一六二六)大僧正(だいそうじょう)の部屋に入り、親しく秘密(密教)の印璽(いんじ・天皇の印である御璽「ぎよじ」と太政官の印である国璽「こくじ」)を受け、(瓶「かめ」の底に至るまで瀉「そそ」ぐように)教えの奥義をあますところなく伝授された。寺に帰って昼夜香を炊き込め修練し、三宝(さんぼう・仏・法・僧の称)を(世に)あまねく広めた。

※義演・・・醍醐寺第八十代座主、早くから秀吉の帰依と知遇を得る

⑩(慶長)五年(一六〇〇)、神君(家康公)は兵を帥(ひき)いて奥州征伐に向かったが(江戸出陣は七月二十一日)、途中の下野(しもつけ・今の栃木県)に於いて、石田三成が近江(おうみ・今の滋賀県)で謀反を起こしたことを聞くに及んで(下野の小山「おやま」で三成の挙兵を聞いたのは七月二十四日)、神君は兵を引き返し、暴雨の急なるを避け、旗(家康の軍隊を指す)は寺に宿った。松平右衛門太夫・村越茂介・善阿弥など近侍の者が、像を礼拝しようとする(来(来)しくしようとする)、神君はそこで宝刀一振り(を納め、像の冥助(目に見えぬ仏の助け)を乞い、且つ定伝に(三成を)降

伏（こうぶく・仏の力によって悪魔や怨敵などを押さえ鎮めること）するための法を執り行わせた。定伝は（神君の）命令を奉じて、勅行（ごんぎょう）に励み、勇み鋭く刀を鑿（た）てて、壇上で声を張り上げて咒（まじな）って曰く「とても鋭い刀剣よ、魔軍を打ち破れ、明王の誓願（大日如来が変身して不動明王となり『一切の悪魔・煩惱を取り拉（ひし）がむ』と誓った事）、豈（あ）に徒（いたずら）に説くならんや。」と。そこで、刀で印（いん）を結んだ。十方（じつぱう・あらゆる方角）を護る宝刀は、忽ち西に傾き倒れ、盛んに、空中に音が起り、宛（あたか）も武器が交わり鳴り響き、鎧（よろい）武者が競い走る如くであった。逆賊は果たして誅（う）たれ亡（ほろ）ぼされたが、其の日は対応しており、実りの秋の九月十五日である。此の刀は世々（寺の）貴重な宝物として伝えられ続けた（去（い）し続ける）。

⑩享保（きょうほう）五年（一七二〇）二月の、寺の災難では、講堂（経典を講義したり説法したりする堂）・房舎が、あつという間に焼失した。（火の）勢いが熾（さか）かんでもう少しで不動堂（不動様を安置している堂）に暨（およ）ぼうとした。住職の隆元（りゅうげん）が、此の災いに遭ったのを悲しみ、とても嘆き泣いて祈願した。突風が忽ちに止み、巍然（ぎぜん・高くそばだつさま）として、免れることができた。

⑪その後、隆元は再建に力を竭（つ）くし、手ずから（自分の手で）錫杖（しやくじょう・僧侶の持つ杖）をつきながら、遠いとこや近いところ（など各地）を巡って資金を求めた。人々は群がり集まったので、わずかな期間で、目的は達成した。高い軒・飛ぶような葺（いらか）、赤い柱・麗しい軒先の横木（となす）。往時の（寺域の）外観を改め、現在の美しさになった。

⑫是（これ）より前に、正徳（しょうとく）五年（一七一五）、隆元は楼門（二階作りの門）を新たに建て、様式は巧を施し、こしらえは意を尽くした。楼上には釈迦三尊像・十六羅漢像を安置し、門の側（かたわ）らには、持国（じこく）・多聞（たもん）の二天像を置き、多くの人々の帰依（教えを受けて、深く仏の真実に従うこと）の目印とした。そこで三学（戒・定「じょう」・慧「え」の三種の実践修行）の継承発展の跡と成った。然るに志に之（これ）を願うこと深く、固（もと）より也（また）煙が衝（つ）いて軒に籠り、余りの火が棟を燦（くすぶ）らしたものの、毫（すこ）しも損なわれる所がなかった。見る者は其の不思議さに驚いた。

⑬（不動）堂の傍（かたわら）に愛宕（あたご）社がある。当山の開闢（かいびやく）

初め、開祖)の神として伝わる。又(また)嘗(かつ)て東照君(家康公)の祠(ほこら)を修繕した時、特に伽藍(がらん・寺の建築物の称)を護る神と為ったのである。

⑮天和(てんな)元年(一六八一)、観如法師は地を(不動)堂の南西に卜(ぼく)し、官(お上、役人、公)に申し上げて、旧制を増飾し、誠意を込めてお祀(まつ)りするに時宜を得た。念呪(ねんじゆ)を執り行うこと誠を竭(つく)した。嗚呼(ああ)神君ひとたび出るや、天下大いに定まり、勲(いさお)しを垂れること禱(きわ)まりなかつた。庶民各々其の所を得て、徳沢(とくたく)・徳によつて教化して得た先人の残した恩恵)の余波を、此の寺に延べ及ぼした。(壇上の明かり用の)香油は欠かすことが無く、衣鉢(いはつ・僧尼の着る袈裟と托鉢の時に持参する鉢「はち」)は匱(ひつ)の中にしまわれず、瑜伽(ゆが・ヨーガ)を修める者は絶え間なく次々と続き、秘密(密教)仏乘(一切衆生をことごとく成仏させる教え)は日増しに繁榮・興隆(こうりゆう)した。(これは)則ち皆神君の賜物である。誰がこのことを思わないであろうか。昔より毎年、正月・五月・九月の二十七日は、不動会(え)と称し、都(江戸)や田舎からほうぼうより集まり、僧侶も俗人もどつと集まり、男女・児童も庭を填(うず)め堂を満たした。夜通し称名(しようみよう・仏の名を唱えること)を渴仰(かつごう・仏を深く信じ仰ぐこと)し、歌唄(かばい)を誦呪(じゆじゆ)した。礼をもつて倣いて各々さし当たつての事を祈るのは、関東での一つの盛んな事と謂える。

※歌唄・・梵語または漢文の偈(げ・お経などからとつた詩文)を読み歌つて(節をつけて唱えて) 仏徳を賛美すること

※誦呪・・密教の修法(しゆほう)で、真言(しんごん)・陀羅尼(だらに)などを節をつけて誦(とな)えること

⑯近ごろ現住職英山(えいざん)は、不動堂の荒れ朽ちるのを歎き、將(まさ)に之(これ)を営み構えんとした。且つ参詣者の盥漱(かんそう・手を洗い口を漱ぐこと)として淨(きよ)く用いるために、職人に命じ、(不動)堂の前に井戸を堀(ほ)らせた。堀ること数仞(じん・一仞は八尺)なるも、唯だ乾いた土ばかりで水を得ることができなかつた。職人らは疲れ倦(う)んで、將に放棄して止めようとした。英山は本尊に水を得ようと求めて誓いをたてて祈つた。すると幾らも掘らぬうちに、水が奔(はし)り湧き、沸き潰(つぶ)れた。激漫(たんまん・水の広く遠い形容)として、玉のように潔く鏡のように澈(きよ)く、余流(本流から分かれた流)の末流の漚(したた)りは、林の際(きわ)を潤し、洗う者は、身や手に垢(あか)・塵(ちり)を罌(きよ)め、飲む者は心や胸に煩わしい思いを蕩(なが)した。榜(たてふだ)して「含満井(がんまんせい)」と名付

けた。

⑩英山は旧誌の紛失を憂え、予(よ)に請うて記録を作らせた。予は素(もと)より無学だが、聊(いささ)か事を録(しる)そうと思う。実に不動尊の敵かで侵し難い徳が、高々と駄舌(げきぜつ・駄「もず」のさえずりのように訳の分からぬことをしやべりたてること)の辺鄙(へんび)の邦(くに)にまで光被(こうひ・君主たるべき徳の行き渡ること)し、遮那法(しやなほう・密教を指す)の燈(ひ)が煌々(こうこう)と(輝き)、(未来の世の)龍華樹(りゅうげじゅ・未来の世にこの木の下で弥勒菩薩が悟りを開くとされる)の開敷(かいふ・一面に花が咲いていること)の曙(あかつき・暁、夜明け)にまで至らんことを(つまり、末法の世を救う第二の釈迦如来となる弥勒如来の誕生まで)、庶幾(こいねが)つてのことであると言う。

享保十四年己酉(つちのととり)八月

武蔵国にある都(江戸)の宝林山靈雲寺第三世

僧侶の慧曦(えぎ)が文を作る

(朱印)	慧	(朱印)	寶
曦		學	印

※「學」は、「子」の古字

小沙弥(しょうしゃみ)光天が薰沐(くんもく・衣服に香をたきしめ、髪を洗って身を清めること)して書いた

以上が『武州大相模不動明王瑞像記』の全訳である。寺社の縁起状というと、とかく寺社にとって都合のよいように書かれるため、事実に基づかないと思われる部分がしばしば見られる。

しかし、この「瑞像記」は言い伝えの部分と事実に基づいて書かれている部分とがはつきりしていて、資料としての信頼性が高く、享保年間という比較的古い資料であるため、大聖寺の享保以前の沿革を明らかにするには欠かせない資料といえる。一部の虫食いは見られるが、完全なまま美しい状態で残っているこの原資料は大聖寺ばかりか、越谷市にとっても中・近世の寺院関係の歴史を解明するにあたって貴重な資料の一つといえよう。

最後に、その「瑞像記」の実物を四十%の大きさに縮小したものを、次のページに載せる。

武州大相模不動明王瑞像記

武州大相模不動明王瑞像記

武州崎玉郡大相模鄉真大山者

武州崎玉郡大相模鄉真大山者

阿遮之雲區瑜伽之淨場也舊有

阿遮之雲區瑜伽之淨場也。旧有

寺志一卷其文纔十餘帛惜哉至

寺志一卷其文纔十餘紙惜哉。至

寬文中而泯焉曾讀古志者語曰

寬文中而泯焉。曾讀古志者語曰

昔在南京良弁僧正神化無有開

昔在南京良弁僧正神化無有開

導獎利方到東國卜築相州大山

導獎利方到東國卜築相州大山

精修嚴勵于昔阿遮明王現形慰

精修嚴勵于昔阿遮明王現形慰

諭辨辨瞻仰生希有想便自刻木

諭弁弁瞻仰生希有想便自刻木

模其相貌長一尺七寸令侍者負所至

模其相貌長一尺七寸令侍者負所至

必隨垂過此村俄而重如盤石雖

必隨垂過此村俄而重如盤石雖

百千人不可舉之即識有緣之地

百千人不可舉之。即識有緣之地

當留之驗將安奉于此而誓曰如

當留之驗將安奉于此而誓曰如

尊意則輕亦若芥試再舉之飄然

尊意則輕亦若芥。試再舉之飄然

猶鴻毛矣遂創一字安置供奉自

猶鴻毛矣。遂創一字安置供奉自

余以來鄉稱大相模山號真大山

爾以來鄉稱大相模山。號真大山

寺名不動坊云又傳此像則與相

寺名不動坊云。又傳此像則與相

州大山之尊像同木所刻而用本

州大山之尊像同木所刻而用本

根然延喜中有一異翁結廬居于

根然延喜中有一異翁結廬居于

鄉之古荒川岸軀沐清流外以潔

鄉之古荒川岸軀沐清流外以潔

齋心欣佛乘內以精進常歸明王

齋心欣佛乘內以精進常歸明王

無復餘念旱澇疫疫凡有難則日

無復餘念旱澇疫疫凡有難則日

夜巡行鄉里誦明王真言以救濟

夜巡行鄉里誦明王真言以救濟

無不其驗土俗呼為生不動翁詣

無不其驗土俗呼為生不動翁詣

相之大山年以十數其所祈願在

相之大山年以十數其所祈願在

得靈像一朝將赴彼山途歷平阜

得靈像一朝將赴彼山途歷平阜

即今御遇一苦行者世云負笈而

即今御遇一苦行者世云負笈而

坐于石上鬚髮垂下威容非常翁

坐于石上鬚髮垂下威容非常翁

一面而互如故舊行者曰汝有何

一面而互如故舊行者曰汝有何

所須數往大山翁告以其志行者

所須數往大山翁告以其志行者

搏髀喟然歎曰奇哉相會吾有瑞

搏髀喟然歎曰奇哉相會吾有瑞

像秘之日久雖無價貨不欲易之

像秘之日久雖無價貨不欲易之

今感汝懇祈則起開笈出不動明

今感汝懇祈則起開笈出不動明

王像與之儼如極大威怒相非人

王像與之儼如極大威怒相非人

工之所能及為行者張眉指像危

工之所能及為行者張眉指像危

坐謂翁曰汝知之耶嘗良辨法師

坐謂翁曰汝知之耶嘗良弁法師

感見明王真身手摹之者此像是

感見明王真身手摹之者此像是

也置而即去翁怪從其所之北數

也置而即去翁怪從其所之北數

百步行者顧曰此地阿遮靈刹須

百步行者顧曰此地阿遮靈刹須

安置于斯忽然不見翁大驚歡躍

安置于斯忽然不見翁大驚歡躍

以爲蓋是大山大聖之所授于予

以爲蓋是大山大聖之所授于予

手便就爾處謀茅安像翁亦苦行

手便就爾處謀茅安像翁亦苦行

多年不知其所終云二緣稍異併

多年不知其所終云二緣稍異併

以傳之抑草創以來數百餘霜奉

以傳之抑草創以來數百餘霜奉

仕像者或出家者流或優婆塞之

仕像者或出家者流或優婆塞之

類屢交替而像之靈應今古無異

類屢交替而像之靈應今古無異

至天文初盜取持像去宿武江某

至天文初盜取持像去宿武江某

宅其夜家屋鳴動震覆賊惶懼謝

宅其夜家屋鳴動震覆賊惶懼謝

罪即送還像爾後有故則精舍必

罪即送還像爾後有故則精舍必

震故世人稱曰家鳴不動天文弘

震故世人稱曰家鳴不動天文弘

治永祿元龜之間武之岩付城主

治永祿元龜之間武之岩付城主

太田資正及北条氏繁崇信當山

太田資正及北条氏繁崇信當山

施賢除役謀家門榮矣天正十二

施賢除役謀家門榮矣天正十二

季沙門定傳者

紀之根來寺性盛法印付法之弟子

季沙門定傳者紀之根來寺性盛法印付法之弟子

有道聲住持之便即一洗當山為

有道聲住持之便即一洗當山為

秘密伽藍其功寔為可稱焉厥后

秘密伽藍其功寔為可稱焉厥后

東照神君遊獵之次柱台駕於

東照神君遊獵之次柱台駕於

茲問像事緣傳恭啓自之 神君

茲問像事緣傳恭啓自之 神君

日靈哉汝其祈予福乎像矣十九

日靈哉汝其祈予福乎像矣十九

年十一月 神君頻感像威驗召

年十一月 神君頻感像威驗召

傳喜捨水田六十石

御朱印及茶山內非常之

傳喜捨水田六十石御朱印及茶山內非常之

書現 且命寺號大聖永為鎮護國

書現 且命寺號大聖永為鎮護國

家之道場乃此山鎮武城之鬼門

家之道場乃此山鎮武城之鬼門

也自茲已來別置僧六口坊今六夙

也自茲已來別置僧六口坊今六夙

夜勦力祝禱昇平報謝君恩慶長

夜勦力祝禱昇平報謝君恩慶長

二年傳詣京師而入醍醐寺座主

二年傳詣京師而入醍醐寺座主

義演大僧正之室親受秘密印璽

義演大僧正之室親受秘密印璽

瀉瓶倒底還寺薰練夜以繼日弘

瀉瓶倒底還寺薰練夜以繼日弘

通三寶五年 神君帥兵征奧及

通三寶五年 神君帥兵征奧及

經途於下野聞石田三成反于近

經途於下野聞石田三成反于近

江 神君還軍避暴雨急旌旗宿

江 神君還軍避暴雨急旌旗宿

寺松平右衛門大夫村越茂介善

寺松平右衛門大夫村越茂介善

阿彌等供奉來禮像 神君便納

阿彌等供奉來禮像 神君便納

寶刀一枚乞像冥助且令傳修降

寶刀一枚乞像冥助且令傳修降

伏法傳奉命精勤勇銳豎刀壇上

伏法傳奉命精勤勇銳豎刀壇上

厲聲咒曰猛利刀劍摧破魔軍明

厲聲咒曰猛利刀劍摧破魔軍明

王本誓豈徒說乎則以刀印結護

王本誓豈徒說乎則以刀印結護

十方寶刀忽西傾倒而鏘々焉聲

十方寶刀忽西傾倒而鏘々焉聲

起於空宛如鋒鏑交鳴甲兵競走

起於空宛如鋒鏑交鳴甲兵競走

逆黨果被誅亡則應其時日而然

逆黨果被誅亡則忘其時日而然

實秋九月十有五日也此刀世々

實秋九月十有五日也此刀世々

傳付以為重器去享保庚子年二

傳付以為重器去享保庚子年二

月寺災講堂房舍一昔燒失勢熾

月寺災講堂房舍一時燒失勢熾

殆暨不動堂住持僧隆元悲遭此

殆暨不動堂住持僧隆元悲遭此

殃孽泣血祈請風颺忽息魏然得

殃孽泣血祈請風颺忽息魏然得

免既而元竭力再管手自振錫乞

免既而元竭力再管手自振錫乞

資遐邇四衆雨聚不日功就高軒

資遐邇四衆雨聚不日功就高軒

飛甍丹柱文樞改觀舊時曜美當

飛甍丹柱文樞改觀舊時曜美當

今先於是正惠乙未年元新建樓

今先於是正惠乙未年元新建樓

門規制施巧締構盡意樓上安釋

門規制施巧締構盡意樓上安釈

迦三尊十六羅漢像門則置持國

迦三尊十六羅漢像門則置持國

多聞二天像以為羣生歸入之標

多聞二天像以為群生歸入之標

乃作三尊紹隆之址然志願之深

乃作三尊紹隆之址然志願之深

固也衝煌竊檐餘燬熏棟毫無所

固也衝煌竊檐餘燬熏棟毫無所

損見者歎其不思議矣堂傍有愛

損見者歎其不思議矣堂傍有愛

岩社相傳當山開闢之神又嘗嘗

岩社相傳當山開闢之神又嘗嘗

修一東照君祠特為護伽藍神天

修一東照君祠特為護伽藍神天

和元年觀如信師卜地於堂西南

和元年觀如法師卜地於堂西南

自官增飾舊制裡祀以時修念竭

自官增飾舊制裡祀以時修念竭

誠嗚呼 神君一出天下大定垂

誠嗚呼 神君一出天下大定垂

勲無窮衆庶各得其所以而德澤

勲無窮衆庶各得其所以而德澤

之餘延章此寺香油無缺衣鉢不

之余延章此寺香油無缺衣鉢不

匱修瑜伽者繩々接踵秘密佛乘

匱修瑜伽者繩々接踵秘密佛乘

日彌繁興則皆 神君之賜也孰

日彌繁興則皆 神君之賜也孰

不思之耶振古每歲正五九月二

不思之耶振古每歲正五九月二

十七日稱不動會都鄙輻湊道俗

十七日稱不動會都鄙輻湊道俗

雲集男女兒童填庭滿堂通夜湯

雲集男女兒童填庭滿堂通夜湯

仰稱名誦呪歌頌禮敬各祈現當

仰稱名誦呪歌頌。禮敬各祈現當。

之事可謂東園之一盛事也。頃歲

之事可謂東園之一盛事也。頃歲

現住英山歎不動堂之荒朽而將

現住英山歎不動堂之荒朽而將

營構之且為詣者盥漱淨用令工

營構之且為詣者盥漱淨用令工

師而掘井於堂前掘數軸而唯乾

師而掘井於堂前掘數軸而唯乾

土不得水焉工等疲倦將棄而止

土不得水焉工等疲倦將棄而止

山祈誓于本尊求得水乃穿不幾

山祈誓于本尊求得水乃穿不幾

則水奔湧沸潰淡漫玉潔鏡澈餘

則水奔湧沸潰淡漫玉潔鏡澈餘

流末澗林蔭潤洗者錫垢塵於

流末澗林蔭潤洗者錫垢塵於

身乎飲者蕩煩想於心胸勝名舍

身乎飲者蕩煩想於心胸勝名舍

滿井矣山憂亡舊誌請予作記予

滿井矣山憂亡舊誌請予作記予

素無文思聊錄事實庶幾阿遮威

素無文思聊錄事實庶幾阿遮威

德巍々被缺舌邊鄙之邦遮那法

德巍々被缺舌邊鄙之邦遮那法

燈煌々至龍華開敷之曙云

燈煌々至龍華開敷之曙云

享保第十四星次己酉仲秋之穀

享保第十四星次己酉仲秋之穀

武都寶林山靈雲精舍第三世

武都寶林山靈雲精舍第三世

享保第十四星次己酉仲秋之穀

享保第十四星次己酉仲秋之穀

武都寶林山靈雲精舍第三世

武都宝林山靈雲精舍第三世

慈芻慧曦作文

慈芻慧曦作文。



小沙彌光天薰沐書

小沙彌光天薰沐書。

『瑞像記』全訳に関する用語補説

- 三行目 阿遮(あしや)・不動明王
 五行目 泯(ほろびる)
 六行目 南京(なんきょう)・南部、
 つまり奈良を指す
 七行目 装(さかん)
 八行目 于時(とき)に
 一二行目 識(しる)
 一四行目 尊意・他人を敬ってその意志
 または意見をいう語
 一四行目 飄然(ひょうぜん)・ひるが
 えるさま、ひらひらするさま
 一五行目 一字・堂宇一つ
 二〇行目 軀(からだ)
 二三行目 巡行(じゅんこう)・目的を
 もって方々を巡り歩く
 二七行目 山臥・中世まで多く見られる
 表記、今は「山伏」
 二九行目 故旧(こきゅう)・旧友
 三一行目 喟然(きぜん)・嘆く(溜め
 息をつく)さま
 三九行目 刹(てら)・寺院
 四八行目 惶懼(こうく)・おそれかし
 こむ
 四九行目 爾後(じこ)・以来
 四九行目 精舎(しょうじゃ)・寺をさす
 五七行目 枉駕(おうが)・乗り物を枉
 (ま)げてわざわざ訪ねて来
 ることから、相手の来訪を敬っ
 て言う言葉
 五七行目 台駕・高貴な人の乗り物
 六四行目 夙夜(しゆくや)・早朝から夜
 遅くまで

- 六五行目 祝禱・神官に依頼し神に祈る
 六八行目 瀉瓶(しゃびょう)・師から弟
 子へ仏の教えの奥義をあます
 ところなく伝授する
 六八行目 弘通(くつう)・遍く広める
 七一行目 旌旗(せいき)・旗の総称
 七三行目 供奉(くぶ)・お供
 七五行目 精勤(しょうこん)・仏道修行
 に励むこと
 七八行目 鏘々(そうそう)・鈴や金玉な
 どの音の形容、さかんな様
 七九行目 鋒鏑(ほうてき)・鋒(ほこさ
 き)と鏑(やじり)、転じて武器
 八二行目 伝付(でんぷ)・伝えること
 八四行目 殆(ほとんど)
 八五行目 殃孽(おうげつ)・災い
 八五行目 祈請(きしょう)・祈願
 八七行目 遐邇(かじ)・遠い所と近い所
 九〇行目 規製施巧、締構尽意・共に対
 句で大体同じ意味
 九三行目 作・くと成る
 九九行目 禋祀(いんし)・神を清め祀
 ること
 一〇二行目 覃(のびる)
 一〇三行目 接踵(せつしょう)・物事が
 続いて起こること。
 一二〇行目 巍々(ぎぎ)・高く大きい
 さま
 一二五行目 沙彌(しゃみ)・新しく仏法
 に入門した二十才以下の僧
 この資料は、
 平成二年八月に作成し
 平成二〇年四月にこの改訂版を作成